

気候地名の身近な例

地名とは人間の生活地域に対して付けられた名前であり、その地域の特徴を示し、他の地域と明確に区別するものといえます。

例えば、岐阜市十六条のように古代土地制度である条里制を表す地名やなど過去の人間の生活と深い関係のあるものや、土岐市の下石や恵那郡明智町の風のよう急斜面を示す地名や御嵩町の謡坂のような細長く続く谷状になった坂などその地域独自の地形を示す地名もあります。

このように考えると地名を知ればその地域の開発の歴史や自然環境などがわかり、それゆえに地名の意義は考古学・歴史学・地理学的な価値を持つことであるとされます。

中でも気候は地形と並んで住民の生活に直接かわる重要な環境要素であり、地名としてよく引き継がれています。

ここでは気候地名の身近な例をみてみたいと思います。

図1の中で加子母町に近い東白川村北東部の越原地区の上流部では大明神川と合流した白川がそこから1kmほどほぼ東西に流れています。その上流の北側に日向(=日向)という気候地名がみられます。

図2の白川町の南部では「赤川」がほぼ東西に流れているところにある開けた谷の「赤河」地区の南向斜面にも日向という地名がみられます。

また、同町最南部で柿反と鱒淵川とが合流して「黒川」となり、ほぼ東西に流れる黒川地区の開けた谷では南向斜面に日向下という地名が見られます。

そして、興味深いのは図1の越原地区の場合、そ

のやや下流の南側に山地の下部斜面から河岸段丘にかけて陰地(=日陰)という対の地名がみられることです。普通は谷が東西方向であっても、南北(左岸・右岸)に対称の斜面や河岸段丘が発達するとは限りません。一方の側が水流の攻撃斜面となり浸食により急斜面が形成されると、農地や居住地とはなりにくく、反対側の緩やかな斜面や段丘面がたまたま北向斜面であっても、それを農耕地や居住地として選択せざるを得なくなります。その結果、その側にのみ気候地名が付けられることとなります。

この場合は北側と南側にややずれて形成された緩やかな斜面や段丘面が両方とも農地や居住地として利用され、川を挟んで対として名付けられたようです。

日向と陰地が対で存在する場合は、日向の方が戸数や古い家(本家)の割合が多く、陰地では逆に戸数は少なく、新しい家(分家)の割合が多いと考えられますが、この場合は戸数は陰地の方が多いそうです。なぜなら陰地の方が農地・居住が広いためです。

また、図2の白川町南部の「赤河」地区の反対側の北向斜面には「小倉」という地名がみられ、日向の対地名ではないかと考えられます。なぜなら「小倉」の「倉」は暗いの意味もあるとされるからです。

このように日向という気候地名は岐阜県の山間地域ではよく見られます。

皆さんも、身近な地域でいろいろな気候地名や地形に関する地名などをさがしてみたらどうでしょうか。

図1 2.5万分の1地形図「小和知」「神土」の接合図
(昭和57年 国土地理院発行90%に縮小)

図2 2.5万分の1地形図「切井」
(昭和55年 国土地理院発行90%に縮小)

「世界分布図センター」には、13万点を超える分布図・地図、地図関係図書があります。

また、「情報工房」ではコンピュータ及びGISソフトを使ってオリジナル地図や分布図を作成し、印刷することができます。

調査・研究や学習、国内外の旅行の準備等お気軽にご利用ください。

岐阜県図書館

世界分布図センター・情報工房

〒500-8368 岐阜市宇佐4-2-1

TEL (058) 275-5111 (内線286)

FAX (058) 275-5115

URL <http://www.library.pref.gifu.jp/map/>

E-mail mapstaff@library.pref.gifu.jp